

## 「バッハ／小ミサ集」解説

ミシェル・コルボ指揮の同曲（WPCS-4275～6）の添付解説、鳴海 史生

### バッハの小ミサ曲

「ミサ」（羅：missa）は、イエス・キリストと弟子たちの「最後の晚餐」（新約聖書「マタイ伝」第26章26～29節、「マルコ伝」第14章22～25節、「ルカ伝」第22章17～22節）を、象徴的に再現、記念する、キリスト教会の典礼である。キリストの身体と血になぞらえたパンとぶどう酒を捧げ、神に感謝し、信者に分け与える、というのがその次第。元来ラテン語で唱えられる典礼文は、教会暦の各主日（日曜日）・祝日ごとに個別に定められる「固有文 Proprium」と、原則として全てのミサに共通する「通常文 Ordinarium」に分けられるが、それらの多くの部分は、典礼の確定された5世紀はじめころから音楽付きで歌われてきた。そして15世紀以降、「通常文」の5つの部分（キリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、アニュス・デイ）に一貫して作曲することが、カトリック教会における「ミサ曲」の定型となる。

カトリックのミサの典礼は、ルター派教会にも受け継がれた。ただしルター派の礼拝では日常語（ドイツ語）の導入が推し進められ、ミサの典礼文も大部分がドイツ語に翻訳された。それに呼応して、ルター派教会のミサにおいては、ラテン語の通常文全文が歌われることもなくなったのである。

バッハの属したルター派教会の礼拝で必要とされるラテン語ミサ曲のテキストは、具体的には「キリエ」、「グロリア」、「サンクトゥス」のみ。しかも「キリエ」は待降節第1日曜日などの特定の主日、「グロリア」はクリスマス、「サンクトゥス」も、クリスマス、復活節、聖霊降臨節の第1・2日、新年、顕現節（1月6日）、昇天節、三位一体節、ヨハネの祝日（6月24日）、ミカエルの祝日（9月29日）、およびマリアの潔めの日（2月2日）、受胎告知の祝日（3月25日）、エリザベツ訪問の祝日（6月2日）に限って演奏された。

そうした機会に演奏されるミサ曲楽章の創作に、バッハはさほど熱心ではなかったらしい。『バッハ作品目録』（BWV）をひもといてみると、「ミサ曲」ないし「ミサ曲楽章 Messensätze」として掲げられているのはBWV232～242、233a、1081の13曲のみ。しかもそのほとんどは、自作のカンタータ、ないし他者の作品の転用である。また、バッハは他人のミサ曲の筆写譜を数多く所有しており、それらを職務としてのミサ曲演奏に、大いに活用したようである。（この点については、Kirsten Beißwengerの労作、"Johann Sebastian Bachs Notenbibliothek" [Bärenreiter, 1992] を参照。）

バッハのラテン語ミサ曲の中心をなすのは、「キリエとグロリア」のタイプの作品である。「小ミサ曲」、あるいは「ルター派ミサ曲」とも呼ばれるこの種の作品は、まず、1733年に書かれた。同年7月27日付でザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世に献上されたその小ミサ曲こそ、のちの《口短調ミサ曲》創作の原点にほかならない。（バッハは、その《キリエとグロリア》に加筆するかたちで、1748/49年に通常文全文による《口短調ミサ曲》を完成させる。しかしこれは、ルター派、カトリック、どちらの礼拝にもそぐわない、まったく特殊な作品である。）

バッハは、「キリエとグロリア」のタイプのミサ曲を、さらに4曲書いた（BWV233～236）。そのうちの2曲（BWV234、236）は自筆譜で伝えられており、用紙の透かしと筆跡から、いずれもライプツィヒ時代なかばの1738/39年ころに成立したことがわかる。他の2曲（BWV233、235）は、バッハの娘婿アルトニコルが1747/48年ころに作成した筆写総譜が唯一の資料であるが、それら2曲も、成立そのものは1738/39年ころであったらしい。

BWV233～236は、音楽的にも共通する点が多い。まず、ほとんどすべての楽章が、自作の教会カンタータの転用によっていること。既作の声楽曲の歌詞を差し替えたり書き直したりすること（パロディ）は、バッハの創作法の重要な要素のひとつであるが、4つの小ミサ曲には、他の作品にもまして、それが顕著なのである。原曲不明のいくつかの楽章も、おそらくは既作（現在は消失）からの転用であろう。

4曲の小ミサ曲は、形式的にも一致している。つまり、どの作品においても、歌詞がいくつかのグループに分けられ、各グループはそれぞれ独立した楽章を形成するのである。具体的には「キリエ」

がひとつの楽章をなし、長い歌詞をもつ「グローリア」は5つの楽章に分けられる。「キリエ」および「グローリア」の冒頭は合唱曲。グローリアの中間は3つに区分され、それぞれ独唱（ないし二重唱）アリアとして曲づけされた。それぞれの区分の仕方は曲ごとに異なるが、しめくくりは常に「クム・サンクト・スピリトゥ」の歌詞による合唱曲である。

これら4曲の小ミサ曲が、ライプツィヒでの職務上の必要から生まれたものであるかどうかは、定かでない。ほとんどの曲がライプツィヒ時代のカンタータの編曲であることからして、その可能性は低いだらう。また、ドレスデン宮廷のため、ボヘミアの伯爵シュボルクのため、といった説もあるが、いずれにも明白な根拠はない。

一方、いくつかの単独のミサ曲楽章（合唱とオーケストラ用）は、明らかにライプツィヒ主要教会の礼拝での演奏を意図して書かれた。3つの《サンクトゥス》（BWV237、238、232/3）がそれであり、いずれもライプツィヒ時代初期に位置づけられる。これら3つの作品では、それぞれ「サンクトゥス」、「プレニ・スト」ではじまる。他の単一のミサ曲楽章は、ほとんどすべて他者の作品の編曲、ないしそれへの挿入である。

## 《ミサ曲へ長調》BWV233

おそらくヴァイマル時代に書かれた単一楽章の《キリエ へ長調》BWV233aを改作し、そこに「グローリア」を継ぎ足すかたちで生まれた作品。「グローリア」の各楽章も、すべて旧作の転用による。編成は、ソプラノ、アルト、バスの独唱、4部合唱、各2本のホルンとオーボエ、ファゴット、弦合奏、通奏低音。

第1曲「キリエ」（へ長調、2分の2拍子）は、上述のとおりヴァイマル時代の旧作の転用である。弦楽器とファゴットが合唱の各パートを重複するモテット風の音楽で、まず「キリエ・エレイソン」の明朗かつ荘重なフーガに起こる。オーボエとホルンは独立した声部(ユニゾン)をなし、ドイツ語版「アニユス・デイ」の旋律を奏でる。中間部「クリステ・エレイソン」のテーマは、「キリエ」主題の転回型によるもの。再び「キリエ」に戻ると、両主題による反行フーガとなる。

第2曲「グローリア」（へ長調、8分の6拍子）は、《ブランデンブルク協奏曲第1番》を思わせる、朗らかで牧歌的な合唱曲。原曲は不明だが、旧作の転用であることは間違いない。

第3曲「ドミネ・デウス」（ハ長調、8分の3拍子）は、3和音の分散音型を主題とする明るいバス・アリアで、弦と通奏低音のリトルネッロを伴う（原曲はやはり不明）。

そこから切れ目なしに演奏される第4曲「クィ・トリス」（アダージョ、ト短調、4分の4拍子）は、教会カンタータ《主よ、汝の目は信ずる者を見守りたまう》BWV102（1726年）第3曲からの転用。しみじみとした味わいをもつオーボエ・オブリガート付きのソプラノ・アリアである。

第5曲、アルト独唱の「クォニウム」（ニ短調、4分の3拍子）もまたBWV102（第5曲）からの転用によるもので、原曲ではフルートの担うオブリガート声部が、ここでは独奏ヴァイオリンによって奏でられる。

終曲の「クム・サンクト・スピリトゥ」（プレスト、へ長調、2分の2拍子）は、教会カンタータ《そのとき神の御子は現れたり》BWV40の冒頭合唱曲に基づく。オーケストラの短い助奏に続いて堂々たる合唱フーガが展開され、輝かしく全曲を閉じる。

### 《ミサ曲イ長調》BWV234

ソプラノ、アルト、バス独唱、4部合唱、フルート2、弦、通奏低音のための作品。第2、4～6曲の原曲が明らかなほか、第1、3曲も、旧作からの転用と考えられる。

冒頭の「キリエ」は、第1キリエ、クリステ、第2キリエが、それぞれ異なったテンポと曲想をもつ。最初の「キリエ・エレイソン」（4分の3拍子）は、付点音符の際立った器楽リトルネッロに導かれるホモフォニックな合唱。「クリステ・エレイソン」（4分の4拍子：演奏によっては独唱者による四重唱）はアダージョにテンポを落とし、瞑想的な気分をかもす。第2キリエ（ヴィヴァーチェ、8分の3拍子）は再び活発な音楽となり、見事な合唱フーガが展開される。

第2曲「グローリア」は、《イエス・キリストをおぼえよ》BWV67（1724年）第6曲からの転用。16分音符音型の伴奏をもつ活発な部分（4分の4拍子）と、付点リズムの伴奏による落ち着いた部分（4分の3拍子）が行ごとに交替してゆく。

第3曲「ドミネ・デウス」（嬰へ短調、4分の4拍子）は、しっとりとした独奏ヴァイオリンのオブリガートをもつバス・アリア。

カンタータ《心せよ、汝の敬神いつわりならざるや》BWV179（1723年）第5曲に基づく「クィ・トリス」（口短調、4分の3拍子）は、ソプラノ独唱が担う。通奏低音は省略され、2本のフルートと弦のユニゾンが奏でる清澄な響きが、切々とした祈りの歌声を包み込んでゆく。

第5曲、アルトの歌う「クォニウム」（二長調、8分の6拍子）では、ユニゾンの弦と通奏低音に支えられつつ、再び明朗な音楽が紡がれる。原曲は、カンタータ《主なる神は太陽にして楯なり》BWV79（1725年）第2曲。

しめくくりの合唱曲「クム・サンクト・スピリトゥ」は、3小節の短い導入部（ヴィヴァーチェ、イ長調、4分の4拍子）と流麗な合唱フーガ（ヴィヴァーチェ、イ長調、8分の12拍子）からなる。音楽は、カンタータ《神よ、われを調べ、わが心を知りたまえ》BWV136（1723年）の冒頭合唱曲に基づくもの。

## 《ミサ曲ト短調》BWV235

教会カンタータ《ものみな汝を待てり》BWV187の主要楽曲を母体に、同《すべてただ神の御心のままに》BWV72および《主よ、汝の目は信ずる者を見守りたもう》BWV102（いずれも1726年）からそれぞれ1曲づつを転用して書かれた作品。歌声部はアルト、テノール、バス独唱、4部合唱、オーケストラは2本のオーボエ、弦、通奏低音の編成による。

第1曲「キリエ」（ト短調、4分の4拍子）は、BWV102冒頭合唱曲の転用。哀切な調子のリトルネッロに導かれるホモフォニックな第1キリエに起こり、対位法的な「クリステ・エレイソン」と第2キリエへと続いてゆく。

第2曲「グローリア」（ト短調、4分の3拍子）は、BWV72の冒頭合唱曲に基づく堅固な合唱フーガ。3部分からなり、中間の「エト・イン・テラ・パクス」では静寂がおとずれる。

バス独唱による第3曲「グラツィアス」（ニ短調、2分の2拍子）には、ヴァイオリン（複数のユニゾン）のオブリガートが付く。原曲はBWV187第4曲。

第4曲「ドミネ・フィリ」（変口長調、8分の3拍子）は、オーボエ、弦伴奏付きのアルトのアリア。BWV187第3曲に基づく、舞曲調の音楽である。

明るい曲調は、第5曲、テノール独唱の「クィ・トリス」（変ホ長調、4分の4拍子 - 8分の3拍子）においても保たれる。オーボエ・オブリガートに支えられるこのアリアは、ゆるやかな前半（付点リズムが目立つ）と、快活な後半からなる。原曲はBWV187第5曲

終曲の「クム・サンクト・スピリトゥ」（ハ短調 - ト短調、4分の4拍子）は、BWV187の冒頭曲に基づく、壮大な合唱フーガである。

## 《ミサ曲ト長調》BWV236

ライプツィヒ時代初期の教会カンタータ《感謝を捧げる者、われを讃えん》BWV17（1726年）、《主なる神は太陽にして楯なり》BWV79（1725年）、《何故に悲しむや、わが心よ》BWV138（1723年）、《心せよ、汝の敬神いつわりならざるや》BWV179（1723年）からの転用による作品。独唱、合唱とも4部、オーケストラはオーボエ2、弦合奏、通奏低音という編成をとる。

第1曲「キリエ」（ト長調、2分の2拍子）はモテット風の合唱曲で、オーケストラは合唱の各パートを重複する。大きく2つの部分からなり、前半の「キリエ」は反行フーガ、後半の「クリステ」は下方4度の模倣音程にはじまるカノンとなる。全編を通じ、半音階的な和声法が音楽に深みを与える。原曲はBWV179の冒頭合唱曲。

第2曲「グローリア」（ヴィヴァーチェ、ト長調、2分の2拍子）は、BWV79の冒頭合唱曲に基づくもの。軽やかなオーケストラ伴奏が耳に快い。

第3曲、バス独唱と弦合奏による「グラツィアス」（ニ長調、4分の3拍子）は、BWV138第5曲を原曲とする、晴れやかな感謝の歌。

4つの小ミサ曲では唯一の二重唱アリア（ソプラノとアルト）である第4曲「ドミネ・デウス」（イ短調、2分の2拍子）では、ユニゾンのヴァイオリンを伴いつつ、神への敬虔な祈りが捧げられる。原曲はBWV79第5曲。

しめやかな情調は、第5曲「クオニアム」（アダージョ、ホ短調、4分の4拍子）においても持続する。これはBWV179第3曲に基づくテノール・アリアで、表情豊かなオーボエのオブリガートを持つ。

終曲「クム・サンクト・スピリトゥ」はBWV17の冒頭合唱曲の改作。ホモフォニックな導入部（ハ長調、4分の4拍子）とフーガの主部（ト長調、4分の3拍子）からなり、堂々たる「アーメン」で閉じられる。

## 歌詞対訳

Kyrie, eleison.  
Christe, eleison.  
Kyrie, eleison.

主よ、憐れんでください。  
キリストよ、憐れんでください。  
主よ、憐れんでください。

Gloria in excelsis Deo.  
Et in terra pax  
hominibus bonae voluntatis.  
Laudamus te, benedicimus te,  
adoramus te, glorificamus te.

いと高きところでは神に栄光あれ。  
そして地上では善意の人々に平和あれ。

あなたをお誉めします、あなたを讃えます、  
あなたを拝みます、あなたを崇めます。

Gratias agimus tibi  
propter magnam gloriam tuam.

あなたに感謝を捧げます、  
あなたの大なる栄光のゆえに。

Domine Deus, Rex coelestis,  
Deus Pater omnipotens.  
Domine Fili unigenite, Jesu Christe.  
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

神なる主、天の王、  
全能の父なる神よ、  
主の独り子、イエス・キリスト。  
神なる主、神の小羊、父の御子。

Qui tollis peccata mundi,  
miserere nobis.  
Qui tollis peccata mundi,  
suscipe deprecationem nostram.  
Qui sedes ad dexteram Patris,  
miserere nobis.

世の罪を除かれた方よ、  
私たちを憐れんでください。  
世の罪を除かれた方よ、  
私たちの願いを聞き入れてください。  
父の右に座られる方よ、  
私たちを憐れんでください。

Quoniam tu solus sanctus,  
tu solus Dominus,  
tu solus altissimus, Jesu Christe.

それはあなただけが聖であり、  
あなただけが主、  
あなただけが最も高い、イエス・キリスト。

Cum Sancto Spiritu  
in gloria Dei Patris, amen.

聖霊とともに  
父なる神の栄光のうちに、真に。